

多面的・多角的な思考力を育成する 小学校社会科授業開発

— 人々の「工夫や努力」の意味理解を深める産業学習に着目して —

高下 千晴・鈴木由美子

Development of Social Studies Class that Cultivate the Multifaceted and Multi-Sided Thinking for Children
— Focused on the industrial learning —

Chiharu KOUGE and Yumiko SUZUKI

Abstract: The purpose of this paper was to develop elementary school social studies class that cultivate the multifaceted and multi-sided thinking. We focused on the learning process of children in order to deepen the understanding the meaning of the “ingenuity and effort” of people especially in the unit of industry learning. We made a new unit that makes children think the process of the industrial development as a “self-realization”, and make them think the understanding meaning of “ingenuity and effort” of people deeply. Based on this, we proposed a model of elementary school social studies class that cultivates the multifaceted and multi-sided thinking for children.

Key words: multifaceted and multi-sided thinking, “ingenuity and effort” of people, self-realization, ability to acquire social perspective

キーワード：多面的・多角的な思考力, 人々の「工夫や努力」, 自己実現, 社会的視点取得能力

1. 研究の背景

「小学校学習指導要領解説 社会編」(文部科学省, 2018)では, 深い学びの実現のためには, 「用語・語句などを含めた個別の事実等に関する知識のみならず, 社会的事象等の特色や意味, 理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計すること」(p.8)と示されている。概念等に関わる知識を獲得させるためには, 授業において社会認識内容の保障を行い児童の思考を深める手立てが必要である。しかし, 実際の授業の中で「深い学び」を実現することは難しいことである。これまで筆者は社会科授業を進める中で到達させたい社会的な見方・考え方を児童に獲得させることができなかつたり, 児童の思考の流れを止めてしまう発言を行ったり等様々な失敗を繰り返してきた。児童が多面的・多角的に思考する「深い学び」を実現させるためにはどのような社会科授業の在り方が求められるのか, その在り方について理論と実践の両面から明らかにしていきたいと考える。

2. 問題の所在

小学校社会科学習において, 人々の行為である「工夫や努力」に着目して社会事象を捉え, その働きについて考えていく学習は, 地域学習や産業学習の中で多く取り上げられている。子どもたちの日常生活にある当たり前のものの裏側にある事実を知り, それを支えるたくさんの人の働きに気付くことで, 子どもたちは意外性と驚きを感じ, 自分達の生活が多くの人の「工夫や努力」により成り立っていることを実感する。特に, 地域素材を学習材として扱うと実際に体験や経験を行うことも可能であり, 子どもたちの学びに対する関心は高まっていく。筆者もまた, これまでの実践の中で地域素材を扱った教材開発を何度も行っている。地域素材を扱うことで, 教師もまた子どもと一緒に追究することができ, 日常生活の中のふとした瞬間に追い求めていた答えに出会えるなどの学びの楽しさを子どもと共有できる。

しかし一方で, 人々のがんばる姿に重きを置きすぎてしまい社会科授業が情緒的なものへと流れてしまう授業も多く見受けられる。木村(2002)は目的一行為

—結果の関係を十分に考慮することなく、「工夫や努力」という行為に目を向けた学習が展開されると、児童の社会認識はきれいごとで終わってしまうと指摘している (p.14)。岩田 (1991) もまたこのような学習は、「苦勞、工夫の社会科」として批判されるものであると述べている (p.67)。社会認識は自然認識と異なり、人の気持ちが入ってくるものであり、そのことで複雑な様相を示す (岩田, 1994, p.71)。そのため、教師が科学的に社会事象を捉えていなければ、人々のがんばる姿のみが焦点化され、学習が進められてしまうのである。確かに社会科学習の魅力の1つは、人の働きや努力、苦勞が見えることであるし、その人が子どもの身近にいる人であればあるほど子どもの関心は高まる。そして、将来社会を支える形成者となるべく子どもたちには働くとはどのようなことなのか是非学んでおいてほしいと教師ならば願うことである。しかし、そちらに偏りすぎてしまうと社会科学習でつけなければならない社会的な見方・考え方を獲得することができず、情緒的な認識の形成にとどまってしまうのである。

3. 研究の目的

本研究では、小学校社会科学習において人々の「工夫や努力」を学ぶことの意義を明らかにし、子どもたちが人々の「工夫や努力」の意味理解を深めるための学習プロセスを明らかにすることを目的とする。ここでは、人々の「工夫や努力」の成果が子どもたちにより具体的に捉えやすい地域にある産業学習を取り上げ、教材開発と実践分析を行い、理論と実践の両面から考察を行う。

4. 小学校社会科学習における人々の「工夫や努力」の学びとは

4.1 産業学習における人々の「工夫や努力」の学びに関する先行研究

小学校における産業学習の中で、個人が登場して内容の中心的位置を占めるようになったのは昭和52年度版の小学校学習指導要領で具体的事例が取り上げられるようになって以後であり、それまでは、一般に概括的に各産業をまとめてそれを理解させる形式で展開されてきた (岩田, 1991, p.67参照)。具体性のある人の登場は、いろいろな状況での人の行動に、自分の感情を入れて考えることができる。例えば農家のAさん

表1 産業学習の4つの型

型	子どもの内面変化を重視する立場	子どもの知的成長を促し支援することを重視する立場		
	① 国民道徳教育としての産業学習	② 日本地誌教育としての産業学習	③ 資本主義的エートス教育としての産業学習	④ 経済学教育としての産業学習
学習の目的とねらい	国民道徳の育成。 具体的には勤勞の「価値」教授に求める立場であり、国家経済の発展に寄与しようとする関心・態度を育成することをねらいとする。	中学校以降の地理学習の準備教育。日本の農工業の実態に「解釈」を教える。人々が利益を上げるべく営んでいる経済活動を取り上げ、それにむけた働き手の工夫や努力を経済活動の意味連関を追究させることをねらいとする。	目的合理的にふるまう経済人の行為とその「解釈」を教える。人々が利益を上げるべく営んでいる経済活動を取り上げ、それにむけた働き手の工夫や努力を経済活動の意味連関を追究させることをねらいとする。	社会科学的な見方を養うこと。経済的事象・出来事について誤りのない知識をつかみ、事実を説明する理論的枠組みを得させることをねらいとする。
社会認識	価値注入に陥る危険性を否定できない。	社会認識の量の確保を優先。	社会認識の質の確保を優先	社会認識の質の確保を優先

(草原 (2000) の論を基に著者が作成)

の具体的姿を通してAさんの問題に対して共感をもって考えていくことができるのである (岩田, 1991, p.68)。それは現在の小学校学習指導要領においても受け継がれている。ここでは、産業学習における人々の「工夫や努力」の学びに関する先行研究として、草原 (2000) 岩田 (1991)、木村 (2002) の論を取り上げ、示唆を得ることで本研究の位置づけを明らかにする。

草原 (2000) は、第5学年の産業学習に内容を限定しているが、産業学習を4つの型に整理している (表1)。表1から人々の「工夫や努力」の姿のみが焦点化されてしまう授業は①の型のように、子どもの内面変化を重視する立場から作られた授業であることが分かる。このことから、人々の「工夫や努力」の意味理解を深める授業にしていくためには、子どもの知的成長を促し支援することを重視する立場に立ち社会認識の質の確保を優先する③と④の型の学習をめざすことが適切ではないかと考える。また、草原 (2000) は③と④の型の意義と位置関係について次のように述べている。③の型は、個別具体的な事象に、よりミクロに人間の経済的行為に焦点をあてるのに対して、④の型

は個別事象を超えた一般的な見方へ、人々の営みを規定する経済の構造へと目を開かせようとしている(p.119)。人々の「工夫や努力」の意味理解を深める学習をめざすためには、④の型のように個別事象を超えた一般的な見方を授業の中で子どもたちに獲得させ社会認識を深めていく必要がある。

岩田(1991)もまた、人々の「工夫や努力」の内容を教材化する際には、経済の視点から検討することが重要であるとしている(p.73)。また、産業学習では、経済の視点から社会事象を見ることが人の行動原理を知るため重要であるとし、経済の視点を工夫や努力の内容の理解に導入することによって社会の現実の厳しさがあらわになり、社会科学習ではこの厳しさから目をそらすべきではないとも指摘している(pp.73-74)。現実の社会においては、いつも新しい取組が成功するとは限らない。様々な困難を乗り越えた上で達成されることもあるれば、達成できない場合も多々ある。それでも、人々は「工夫や努力」を繰り返していくのである。そのような困難があることに気付いていくことは人々の「工夫や努力」の意味理解を深める上で必要不可欠なことである。

また、人々の「工夫や努力」の指導にあたって、木村(2002)は「自己実現」の営みをキーワードに挙げている。人々の「工夫や努力」は単に利益や報酬を得ることをめざしたものではなく「自己実現」の営みであること、新たに生じた課題を解決しようと意欲的に試行錯誤を重ねている未来に向けての挑戦的な営みであり現在進行形のものであることを指導していくべきだとしている(p.19)。それは、子どもたち自身もまた日々の生活の中で「自己実現」を図っている存在そのものであるため、自分の生活と重ね合わせることができ、実感を伴った共感を可能とすることができるからである(p.19)。人々の「工夫や努力」を「自己実現」の営みと捉えることで、教材化にあたりどのようなところに共感させていけば意味理解を深めることができるのかを焦点化することができる。

これらの先行研究から、人々の「工夫や努力」の意味理解を深める産業学習の教材化においては経済の視点から検討を行うこと、そして指導にあたっては、人々の行為の奥にある社会の厳しさもみつめさせながら、人々の「工夫や努力」を「自己実現の営み」ととらえさせていくことが重要であることが明らかになった。それでは、実際の社会科授業においては具体的などのような授業構成が行われ、人々の「工夫や努力」はどのように扱われているのだろうか。

4.2 先行実践における人々の「工夫や努力」の扱い

次に、産業学習の先行実践を2つ取り上げ、人々の「工夫や努力」をどのように扱いながら意味理解を深めているのか分析を行い、示唆を得たい。これらの実践は、産業学習の型の種類(表1)の④経済学教育としての産業学習にあたるものである。

まずは、第5学年の産業学習のまとめとして「100円ショップのひみつ」を扱った真加部(2007)の実践を取り上げる。この学習では、企業は利益を上げることを目的に活動しており、その活動が私達の生活に様々な影響を与えていることを考えさせることを目的として単元開発が行われている。真加部は、働く人々の「工夫や努力」を情緒的にとらえさせ、客観的な社会的事象の見方・考え方が多く見受けられることについて問題意識を持っている。そこで、構造化された問いに対して仮説を立て、検証を繰り返す過程で、学習の目的に即した資料を活用し、より科学的な説明ができるような説明型の授業構成を行っている。その中で、注目したいのが課題追究の場面の終結部分の発問である(表2)。

表2 単元「100円ショップのひみつをさぐるう」における発問

	課題追究1	課題追究2	課題追究3
主な問い	なぜ、100円ショップは売上げや店舗数が伸びているのだろうか。	なぜ、100円という低価格で販売できるのだろうか。生産の面から考えよう。	なぜ、100円という低価格で販売できるのだろうか。輸送と販売の面から考えよう。
終結部分の発問	100円ショップは、売上げを伸ばすために、どのような集客力を高める工夫をしているのかをまとめよう。	なぜ、100円という低価格で売ることができ、生産の面からどんな努力をしているのかをまとめよう。	100円ショップは外国からの輸送にかかる経費を安くするために、どんな努力をしているのかをまとめよう。

(真加部(2007)の学習指導案より一部抜粋 筆者が作成)

真加部(2007)は、授業展開の中で「工夫や努力」という言葉には触れていない。触れているのは課題追究の場面における終結部分のみである。人々が行っている経済活動の合理的根拠をデータに基づいて吟味させた後で人々の「工夫や努力」について問うことで、子どもたちは人々の「工夫や努力」の内容について情緒的に流されることなく具体的に説明することができる。真加部の実践から、科学的な説明による理解をベースとした上で人々の行為についての発問を行うこと

は、1時間の授業の中で獲得させたい社会認識を深めることができることが明らかになった。

次に、菊池（2007）が行った第5学年の情報発信に重点をおいた農業学習「ミルクとワインのまち葛巻町」を取り上げる。菊池は大規模営農が難しいとされる山間地域でありながら、順調な農業経営を持続発展させている岩手県葛巻町の取組を「利益追求」の視点から教材化を行っている。そのため、この単元で扱う人々の「工夫や努力」は、「経営努力」に焦点が絞られている。葛巻町の人達が利益追求のためにどのような「経営努力」をしているのか、事実（資料）を基に授業は展開されていく。その中で子どもたちは単元最後の時間に大規模営農ができない山間地域では普通の「経営努力」だけでは限界があることに気付く。そして、これまでの学習で獲得した認識だけでは説明できない状況となる。そこから、子どもたちは持続可能な利益を追求できる農業の条件について考え始め、葛巻町の人達が情報発信の工夫を行い、努力している意味について理解し、持続可能な農業の在り方について認識を深めていく。菊池の実践から、単元のねらいを絞ることで扱う人々の「工夫や努力」もまた焦点化されることが明らかになった。焦点化することで、人々の「工夫や努力」の行為の背景にある深い意味を理解することを可能とし、個別事象から一般的な見方へと子どもたちの目を開かせている。

2つの先行実践とも、人々の「工夫や努力」を経済的な視点である「利益追求」により説明し、到達させたい社会的な見方・考え方を子どもたちに獲得させ、人々の「工夫や努力」の意味理解を深めている。先行実践の意義は、経済的な視点により人々の「工夫や努力」を説明し、その意味を深めていくとは具体的にどのような姿なのかということを明らかにしているところである。

4.3 本研究でめざす人々の「工夫や努力」の意味理解を深める授業の在り方

それでは、先行研究と先行実践から得られた示唆を基に、本研究でめざす人々の「工夫や努力」の意味理解を深める授業の在り方を示していきたい。

本研究では、人々の「工夫や努力」の意味理解を深めるために経済的な視点から教材解釈を行い、時間軸を取り入れた産業学習の単元開発を提案したいと考える。マズロー（マズロー／原訳、1968）は、「人間は自己実現に向かって絶えず成長するものであるとし、低次の欲求が満足すれば高次の欲求へと無意識の中で発展していくものである」と述べている（p.13）。また、仕事とは「人をして自己実現の欲望を満足させる一種の精神療法である」とも述べている（p.1）。マズロー

の視点から産業発達を捉えると次のように考えることができる。人々が産業を興した動機は多くの場合、生きていくための糧を得るためである（安定的欲求）。そして、生きていくための基盤が出来上がると人々は経済的安定をめざして邁進する（帰属的欲求）。人々は経済的安定を求めながら社会で果たす自分達の役割に気付き（尊敬的欲求）、「自己実現」に向かって絶えず成長をめざすのである（自尊的欲求）（マズロー／原訳、1968参照）。このように、産業の発達はこのような「自己実現」をめざす人間の行為による結果とも考えることができる。時間軸で1つの産業を捉えることは、人々の「工夫や努力」を自己実現の営みとして、そして現在進行形の営みとして捉えることにつながる。また、時間軸で産業を捉えた場合、現在に近づけば近づくほど社会が多様化していくため、これまでの常識では解決できない問題が出てくる。このような事例を発見できたなら子どもたちの社会認識形成は一気に広がり、人々の「工夫や努力」の意味理解を深めることができると考える。

5. 研究の仮説

産業学習において時間軸を取り入れた単元構成を行えば、産業発展の過程を「自己実現」の営みとして捉えることができ、人々の「工夫や努力」の意味理解を深めることができるだろう。

6. 検証方法

みかん産地成熟期の社会事象を取り上げた5時間目授業の子どもたちの発言記録から思考の変容過程の分析を行い、人々の「工夫や努力」の意味理解の深まりの道筋を見取る。

7. 対象授業の概要

7.1 研究対象と研究期間

7.1.1 研究対象

H県R小学校 第5学年22名

7.1.2 研究期間

令和元年7月1日～12日、小単元「みかんの島・大長」（全5時間）を開発し、実践を行った。

7.1.3 単元目標

- ・呉市豊町大長（大崎下島）で150年前から始められた柑橘栽培の発展の歴史を通して、地域特性を生かし、新たなチャレンジを続けることで他地域との差別化を図り、全国有数のみかん産地を形成

することで地域社会の経済的基盤を安定させてきたことを理解させる。

- ・「大長みかん」ブランドの伝統を守りながら絶えず革新を続ける人々の働きの意味について考えさせる。
- ・地域農業を確立し未来を見据えて試行錯誤を重ねながらみかん産業を発展させてきた人々の姿から、人々の「自己実現」の営みに共感を持たせる。

7.1.4 徹底したイノベーションによるブランド形成の歴史

大長のみかんの歴史は、言い換えれば持続的交換を有利に実現するための徹底したイノベーションが行われてきた歴史であり、現状変更を遂行できるまで耐え抜いた人々の努力の足跡でもある。野中・勝見（2004）は、イノベーションとは小手先の商品開発などではなく、それぞれに自分はどのように生きていくべきなのかという存在論的な問いかけがあり未来を見据えた上での行動であると述べている（p.345）。大長のみかん栽培が始まった明治時代のはじめ、みかんは稀少性のある農産物であり、作れば高く売れるものであった。村のリーダーはそのような時代に既に、目先の利益だけではなく将来も売れ続けていくためにはどのような手立てが必要なのかという未来軸を意識し、住民の反対がある中でもリーダーとしての自己の役割を果たすため村を挙げての新たな改革（共同選果場の導入による合理的な流通システムの確立）を断行している。その結果、大長みかんは販路の拡大を可能とし、市場においても他産地のみかんより高値がつくブランドみかんとしての地位を確立していった。そして、作れば売れる時代ではなくなった現在においても地域ブランドとしてその地位は維持されている。また、現在栽培が拡大されているレモンについても同様である。レモン栽培は100年前に日本で初めて大長で始まった。大長を舞台として描かれた物語である椋鳩十作「黄金の島」

（ポプラ社）の中では、レモンは細々でよいので作り続けるように村で言い伝えられてきたというエピソードが紹介されている。細々と栽培が続けられてきたレモンは現在、大長を経済的に支える農産物であり、みかん産地を守るために欠かせないものとなっている。このような大長の人達の品種選択における先見性やバイオニア精神にも驚かされるものがある。経営の本質は、論理でもなければ、分析でもなく、関わる人々の未来に自己を投企しようとする生き方そのものである（野中・勝見，2004，p.346）。大長みかんの歴史は、それぞれの時代に生きた人々が未来軸を意識しながら、今、自分ができることを自己の役割を果たし生きてきた歴史とも捉えることができる。

7.1.5 皇室献上品に対する人々の見方と価値観

大長みかんが皇室献上されたのは大正2年のことである。皇室献上品とは、民間から天皇家や宮家に献上される物品であり、全国からお墨付きの自信作が集まるものである。たった一度の献上であっても皇室に品物を献上することは品質が認められたものでなければできないため、大きな実績となる。

明治24年に「宮内省御用達」制度が発足した。御用達の制度は国内産業の促進を奨励するために掲げられたものである（日本文化再発見研究室，2001，p.140）。当時、制度により許可制になったにも関わらず、「御用達」を詐称する者は後を絶たなかったといわれる。このことから「宮内省御用達」「皇室献上品」の当時の人々の見方が絶対的な価値を持ったものであったことが分かる。そのような時代に大長では皇室献上を行うことができたのである。実際に、皇室献上を行ったことが大正6年に新聞に掲載された後、大長みかんの価値は大きく上昇している。大長みかんがブランドとして評価された背景には、徹底したイノベーションによる品質管理と販路の拡大、そして「皇室献上品」という付加価値が加わったためであると考えられる。現

表3 単元「みかんの島・大長」学習指導計画

	時代	社会認識	学習活動	社会事象	見方
1	江戸	柑橘栽培を始めた理由	瀬戸内海の島々で行われている柑橘栽培の歴史について関心を持たせる。	栽培条件品種	地理
2	明治	品質管理の工夫	大長の人たちが共同選果場をいち早く設立した理由について調べる。	共同選果場の設立	経済
3	大正	供給量安定への努力	大長の人たちがみかんの生産量を増やすために考えた方法を調べる。	出作	経済
4	昭和	投資による事業拡大	農船の性能をよくすることで得られた経済効果を考える。	農船の発達	経済
5	平成	伝統と革新を続ける理由	「大長みかん」ブランドを守るために大長の人たちが行っている取組について調べ、その理由について考える。	レモン栽培の拡大	経済

在では、御用達制度は廃止され、献上品については新規の受け入れは行っていない。しかし、ロイヤルブランドの持つ影響力は国内においては未だに健在であり、「皇室献上品」という昔からの看板を今でも掲げて商売を行っている業者も少なくない。大長においては「皇室献上品」と大々的に宣伝されてはいないが、今でもみかんは他の柑橘と比べ別格の扱いがされている。その一つの例として新たな品種の導入が挙げられる。大長では、レモンなどみかん以外の柑橘の新たな品種の導入は盛んに行われている。しかし、JAゆたかによるとみかんだけは新たな品種を導入する予定はないとのことである。つまり、昔からの早生温州みかんが今でもそのまま守られているのである。このことから人々の「大長みかん」に対する絶対の自信を感じることができる。言い換えると、当時の社会的価値や人々の見方が無意識のうちに「伝統」として受け継がれていると捉えることもできる。合理的なイノベーションを繰り返している大長の人達は、同時に「伝統」という非合理的な人々の価値観も持ち続けているのである。イノベーションとは、単に古いものを壊し新しいものに変えていくのではなく、それまで自分達が大切にしてきた価値観の上に成り立つものとも言える。

7.1.6 「イノベーション」を基軸とした単元構成

これらのことを踏まえて本学習では、人々の「工夫や努力」を「イノベーション」の視点から捉えさせることにした。図1は、1つの「イノベーション」の過程を図式化したものである。図1を活用した単元構成は図2のとおりである。みかん栽培の歴史を3つの時期（形成期・成長期・成熟期）に分けた。明治時代から大正時代までのみかん栽培を軌道に乗せた時期を

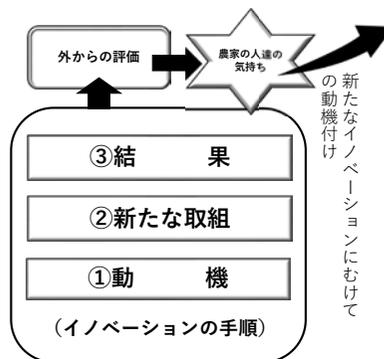


図1 「イノベーション」の過程（筆者作成）

「形成期」、みかんの出荷量が増加し供給量安定が実現できた昭和時代を「成長期」、食生活が多様化し品質や個性が求められるようになった昭和時代の終わりから平成時代を「成熟期」と区分した。今回の学習では単元構成図の中に「(外からの評価を受けての)農家の人達の気持ち」からの視点も取り入れた。「イノベーション」という合理的な行動を突き動かす原動力は人の気持ちによる部分も大きいと考えたためである。大長みかんブランド成立の過程を大長の人達による「自己実現」の過程と重ね合わせて見ることで、「やる気（形成期）→自信（成長期）→責任・誇り（成熟期）」とした。これは、子どもたちが大長の人達に共感しながら学習を進めていく上で必要な視点であり、人々の「工夫や努力」の意味を実感し、自分の生活との関わりを見出す上でのパイプの役割を果たすものになると考えた。

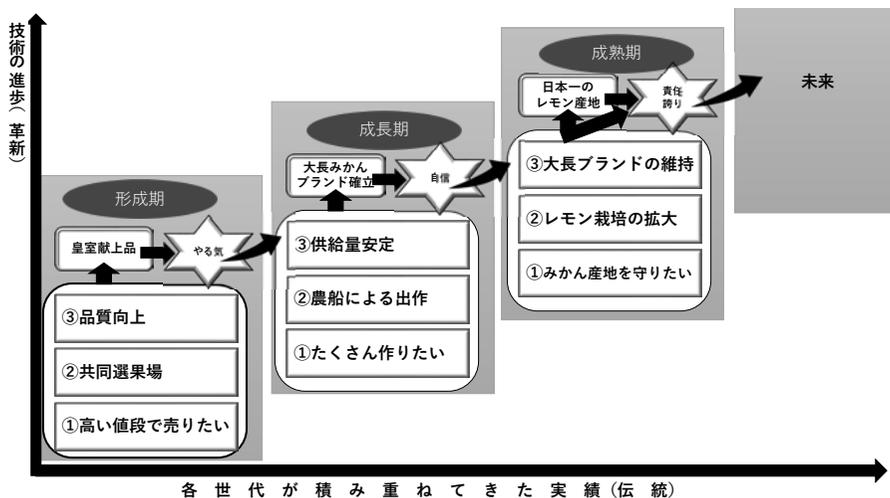


図2 「イノベーション」の視点による「みかんの島・大長」の単元構成図（筆者作成）

8. 検証

表4 視点取得能力の発達段階 (加藤2010)

段階	視点取得能力	学年
段階1	他者が自分と異なった意図で行動していることを意識していない。この時期は、自他の意識が未分化な段階である。	1年生頃
段階2	自分の行動と他者の行動が異なることに気づいているが、他者の行動の意図を十分には推測しない。この時期は自他の違いの意識化が始まる段階である。	2・3年生頃
段階3	他者の行動の意図を推測するようになり、次第に他者の視点を自分の視点に取り込みながら自分の視点そのものも変えていく段階である。	4・5年生頃
段階4	様々な視点を取り込み、それを内化させることによって事象が多面的に見えるようになり、判断をする際にも複数の考えの中から望ましいものを選択するようになる。この時期は、他者の視点を自分の視点の中に積極的に取り込みながら、自分の視点そのものをより望ましいものに作り変えていく段階である。	6年生頃

8.1 5時間目授業の位置づけ

5時間目授業は単元最後の学習である。成熟期である平成時代の大長のみかん産業の様子を取り上げる。1972年のみかんの価格大暴落の後、海外からのオレンジ輸入自由化、消費者の嗜好の多様化などにより、みかんはおいしいものを作ってもすぐには売れない時代へと入っていく。また、2008年に豊町では架橋による陸路の交通手段の確保が可能となったが、過疎化は進む一方で、みかん農家の後継者不足そして高齢化はこれまでに経験のない深刻な状況となっている。そのような状況の中で行われている新たな取組がみかんレモンの複合経営の推進である。ここでは伝統(みかん栽培)を守るため革新(レモンとの複合経営)を続ける人々の「工夫や努力」の意味理解を深めていく。守らなければならないものは徹底して守り、変えなければならないものは徹底して変えていくブランド維持のための人々の行動原理を理解させていく学習場面でもある。

8.2 視点取得能力による発言記録の分析

1時間の授業の中における子どもたちの思考の変容過程を見取るために、発言記録を加藤(2010)の提唱する視点取得能力の発達段階を援用してまとめた(図3・4)。アクションリサーチ実地研究Ⅱ(以下AR

(出典：加藤寿朗(2010)『社会的認識』栗山和広編著『子どもはどう考えるかー認知心理学からみた子どもの思考ー』おうふう、p.143より転載。)

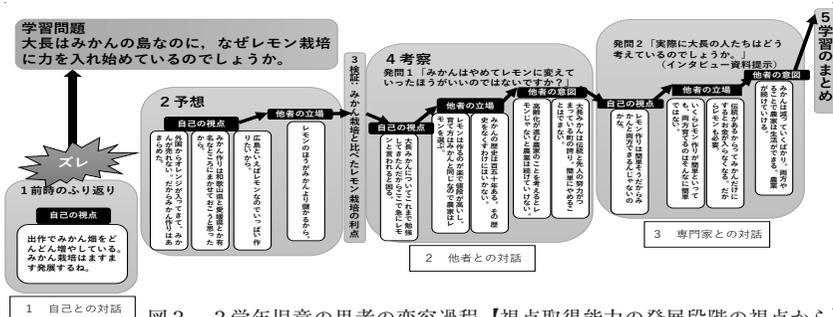


図3 3学年児童の思考の変容過程【視点取得能力の発達段階の視点から】

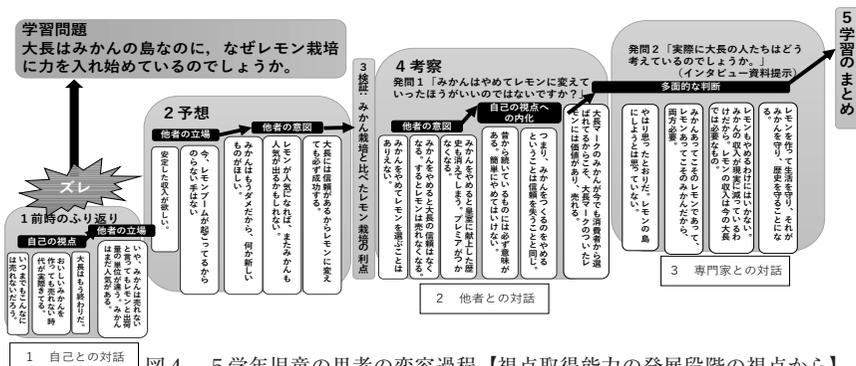


図4 5学年児童の思考の変容過程【視点取得能力の発達段階の視点から】

Ⅱと表記)で明らかになった3年生児童による思考変容過程とアクションリサーチ実地研究Ⅲ(以下ARⅢと表記)で明らかになった5年生児童による思考変容過程を比較してみる。

ここで明らかになったことは、中学年児童と高学年児童の思考の深まりの過程の違いである。今回の学習で取り上げた「みかん栽培」は大長の伝統であり、伝統は人々の心理によって説明ができるものである。一方「レモン栽培」は現在の大長の経済的安定を支えるものであり、経済的な視点から論理的な説明ができるものである。ブランド維持のための人々の行動原理を説明するためには、論理的な説明だけでは説明しきれない。産業が人間の営みである以上は必ず心理的な説明も必要である。この2つの矛盾した概念の補完関係を説明することができるのが、人々の「工夫や努力」の意味理解を深めたことになると考える。実際の授業においては、中学年児童は「みかん」と「レモン」のそれぞれの2つの立場に分かれ、まずは自分が共感できる立場からの説明を行っていった。そして、「他者との対話」、「専門家との対話」を通すことで、「論理」と「心理」の補完関係を説明することができた。しかし、高学年児童のようにブランド維持のための人々の「工夫や努力」の意味までは説明することはできていない。中学年の学習では、農業維持のための人々の「工夫や努力」の意味理解となった。一方、高学年児童は、検証を行った後すでに「みかん」と「レモン」のどちらかの立場に立つことは不可能であると判断していた。そのため、その後の「他者との対話」、「専門家との対話」は、「論理」と「心理」の補完関係の説明を補強する場となった。今回の学習では、考察2で提示した資料は中学年も高学年も同じものを使用した(資料1)。中学年児童はこの資料により認識を深めていくことができたが、高学年児童にとっては物足りない内容となった。その理由として、資料1は「他者との対話」において導き出してきた認識を強化するものではあったが、高学年児童にとって新しい発見がなかったことが挙げられる。資料1は人々の心情に沿った内容であった。そのため、高学年児童にはより論理的な内容の資料を提示していかなければ、他者との対話により深まった認識を高めることができないことが明らかになった。

9. 考察

人々の「工夫や努力」の意味理解を深めていくためには、経済の視点による「論理」の説明と共に「心理」を考えさせることが有効な学習方法であることが発言

わたしたちは、今、日本一のレモンの産地として、レモンづくりをせっせよくすすめています。レモンのなえ木を無料で農家の人たちに分けて、レモンを植えてもらうはたらきかけをしています。

だからといって、わたしたちは大長のみかんの島からレモンの島に変えようとは考えていません。レモンを農家の人たちにすすめているのは、みかんを育てながら一緒に育てることができるものだからです。

レモンを育てることでみかんを育てることができなくなるのならば、レモンを農家の人にはすすめなかったと思います。



JAゆたか Oさん

資料1 考察2における提示資料

記録の分析により明らかになった。図5図6は、中学年、高学年それぞれの人々の「工夫や努力」の意味理解を深めていく思考変容過程の分析から明らかになった1時間の授業モデルである。

人々の「工夫や努力」の意味理解を深めるためには、徹底した教材研究と共に児童の発達段階に即した思考の過程を大切に授業展開を行うことも重要な要素の1つである。

10. 成果と課題

成果は、中学年児童と高学年児童の思考変容過程から、人々の「工夫や努力」の意味理解を深める学習プロセスを明らかにすることができたことである。中学年児童では、人々の心情に寄り添いながら対話を行うことで意味理解を深めていった。中学年の学習では人々のがんばりに共感することが学習を進める上で高学年よりも効果的である。一方高学年の学習では、人々のがんばりに共感させるだけでなく、対話の中で人々の「工夫や努力」の要因について多面的な判断を行わせ、論理性の高い資料を提示することで一般化させていくことが重要であることが分かった。つまり、高学年児童は人々の心情に寄り添いすぎると逆に意味理解が深まらなくなるのである。課題としては、実践授業の中で論理性の高い資料の具体ができていないことである。ブランド維持のための人々の行動原理を一般化できるための高学年用の資料の作成を行っていきたい。また、時間軸による単元構成が「自己実現」の営みとして人々の「工夫や努力」の意味理解を深める上で効果的であることも実践を通して明らかにすることができた。時間軸で産業発展を捉えることは、子どもたちの人々の行為に対する実感を伴った共感を可能とし、当事者意識を持ちながら学習を進めることができる。

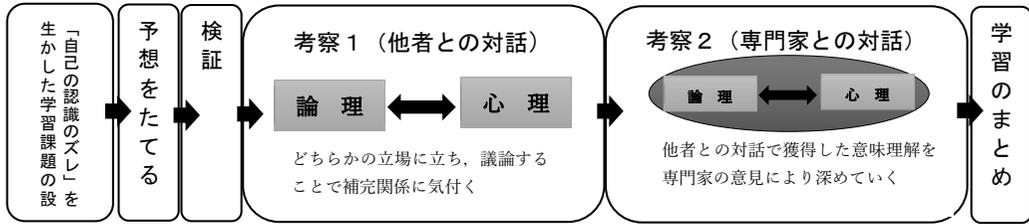


図5 人々の「工夫や努力」の意味理解を深めるための1時間の中学年授業モデル（筆者作成）

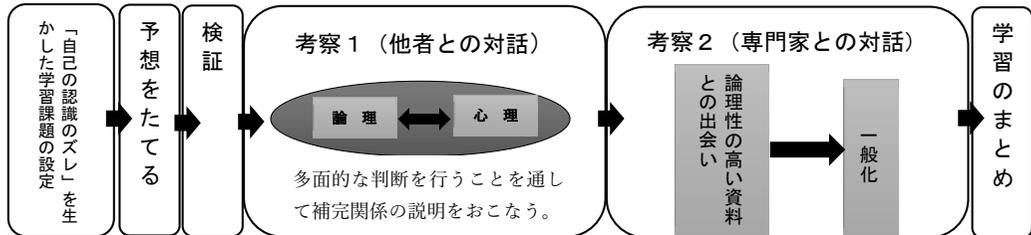


図6 人々の「工夫や努力」の意味理解を深めるための1時間の高学年授業モデル（筆者作成）

11. 終わりに

ARⅢの実践を通して、具体的な人の姿を通しての学びは、子どもたちにとって魅力的な学びにつながると改めて感じた。しかし、それはその人の生きる姿の中に自分と通じるところがなければ魅力的に感じることはできない。子どもたちが安定した変動のない価値観が存在する社会の中で生きていくのであれば、身近な大人の生き方をそのままモデルとして生きていけば何も問題はない。しかし、現在の多様化した価値社会の中で生きていくためには、様々な人々の生き方を知るだけでは不十分であり、変化に対応しながら生きていくための資質・能力が必要とされる。小学校社会科学習において、人々の「工夫や努力」の意味理解を深めることはこの資質・能力を育成することにつながると考える。そして、変化に対応しながら人々はどのような「工夫や努力」を繰り返しているのかを社会の仕組みを通して学習することは、子どもたちの多面的・多角的に社会を見る眼を養っていくこととなる。それは社会の形成者として自分はどのように判断して生きていくべきなのかという考えが持てるようになるための基盤となる。小学校教師は、そのような資質・能力を育成できるような社会科授業をつくらなくてはならない。

（註）本論でいうアクションリサーチ実地研究とは、広島大学教職大学院の授業として行われている学校現場での実践研究であり、ARⅡは2018年度後期、ARⅢは2019年度前期を指す。

※発言記録においては、個人が特定できないように配慮を行った。

※本論文は広島大学教職大学院の授業であるアクションリサーチ・セミナーⅢの研究成果に修正加筆したものである。「課題研究報告書」の一部を構成する論文である。

引用文献・引用順

- ・木村博一（2002）「小学校社会科の学力像と産業学習の変革—『自己実現』をキーワードとした単元開発—」『社会科研究』第57号 全国社会科教育学会 pp.11-20.
- ・岩田一彦（1991）「産業学習の内容」岩田一彦編著『小学校産業学習の理論と実践』東京書籍 pp.57-76.
- ・岩田一彦（1994）『社会科授業研究の理論』明治図書.
- ・草原和博（2000）「産業学習」日本社会科教育学会『社会科教育事典』ぎょうせい pp.119-120.
- ・アブラハム・H・マズロー 原年廣訳（1968）『自己実現の経営—経営の心理的側面—』産業能率短期大学出版部.
- ・真加部三智也（2007）「社会的事象の見方・考え方を育成する産業学習の授業」全国社会科教育学会編『小学校の「優れた社会科授業」の条件』明治図書 pp.53-63.
- ・菊池八穂子（2007）「情報発信に重点をおいた農業学習」全国社会科教育学会編『小学校の「優れた社

- 会科授業”の条件』明治図書 pp.64-72.
- ・野中郁次郎・勝見明（2004）『イノベーションの本質』日経BP社.
 - ・日本文化再発見研究室（2001）『皇室御用達ものがたりーロイヤルブランドの技と心ー』祥伝社.
 - ・加藤寿朗（2010）「社会的認識」栗山和広編著『子どもはどう考えるかー認知心理学からみた子どもの思考ー』おうふう pp.128-146.

教材を開発するにあたり参考にした文献

- ・有元正雄（1985）「広島県豊町における柑橘栽培史ー戦前を中心としてー」『内海文化研究紀要』13 広島大学文学部 pp.1-22.
- ・内田龍之介（2016）「柑橘生産をめぐる行政と農協の連携ー広島県を事例にー」日本農業研究所研究報告『農業研究』第29号 pp.367-392.
- ・中国四国農政局広島統計情報事務所編著（1978）『広島県のみかん作のあゆみ』広島農林統計協会.
- ・中国新聞社『芸南地方 瀬戸の島』（1978）.
- ・根岸久子（2009）「レモンで産地活性化を図る柑橘の島ー安全・安心へのニーズを追い風にブランド化ー」『JA 総研レポート』2009春 第9号 pp.40-43.
- ・村上節太郎（1955）「広島県大長村の専門的柑橘栽培ー特に渡り作についてー」『地理学評論』28巻2号 pp.51-61.
- ・豊町教育委員会（2000）『豊町史』.